

## ○平成18年度奨励研究

# 「介護老人保健施設における移動手段の違いによる 覚醒時活動量と主観的幸福感」

作業療法学科 助手 相原 育依

### 1. 研究目的

高齢者の日常生活において、彼らが自立歩行をしたり、杖やシルバーカーを用いたりすることによる移動範囲の拡大は、本人の生活の質に影響を及ぼすことが知られている。しかし、高齢者の日常生活活動量が主観的幸福感に及ぼす影響について検討されている対象者は主として在宅健常歩行自立者である。介護保険施設入所者を対象とし、さらに移動手段による主観的幸福感を検討した研究は見当たらないのが現状である。

本研究は、セミクローズなコミュニティで日常生活を過ごす介護老人保健施設入所者の中で、シルバーカー移動の入所者と移乗自立で車椅子移動が自立している入所者の2群における覚醒時活動量(以下活動量)と主観的幸福感(以下幸福感)を検討することである。

### 2. 研究方法

対象者を、シルバーカー移動の入所者7名(平均年齢 $80.9 \pm 5.1$ 歳:以下シルバーカー群)と移乗が自立している車椅子移動の入所者4名(平均年齢 $81.0 \pm 2.0$ 歳:以下車椅子群)の計11名とした。本研究の対象者は、1)HDS-Rが18点以上である者、2)BPSD(認知症による行動的心理的徴候)の観察されない者、3)コミュニケーションが可能な者、4)本人より文章による研究参加のインフォームドコンセントが得られた者、とした。両群間における年齢、痛み・趣味の有無、BMI、抑うつ度(GDS15)ならびに健康状態・自己の体力(Visual Analogue Scale)に有意差はなかった。

活動量は三次元加速度計(以下アクチグラフ)を3日間非利き手に装着することにより測定した。幸福感としてPGCモラールスケール(以下PGC)を聴取した。両群間における活動量と幸福感との関係を検討した。アクチグラフより得られたデータの解析はStatViewJ-5.0を用いた。有意水準はすべて5%未満とした。

### 3. 研究結果

両群間の活動量およびPGCに有意差は観察されなかった( $p=0.663$ ,  $p=0.705$ )。シルバーカー群では、活動量とPGCの相関係数は $r=0.79$ と「正の強い相関関係がある」一方、車椅子群では、相関係数は $r=-0.44$ (「負の相関関係はある」)を示した。

### 4. 考察(結論)

今回、両群間の活動量およびPGCには有意差は認められず、シルバーカー群における活動量とPGCの相関は在宅高齢者の先行研究と同様な結果を示したが、車椅子群においては活動量が多いほど幸福感が低くなる傾向を示した。このことは、今回は少数例だが、車椅子を移動手段とする施設入所者においては、必ずしも活動量と幸福感は強く関係をもつとは示唆されなかった。つまり施設という限定された日常生活空間内を車椅子で移動する当該群の幸福感は、活動量のみの要因とは限定されず、車椅子の使用期間や日常生活における心理社会的な様々な要因が推測される。そのため、施設入所者に対する作業療法介入においては、身体機能のみに限定することなく、個別・集団活動等を応用した心理社会機能に着目した介入の重要性が示唆された。

## 5. 成果の発表(学会・論文等, 予定を含む)

本研究の成果は、第41回日本作業療法学会で発表する。(採択:平成19年6月。鹿児島)

## 6. 参考文献

- 1) 竹中晃二、レオナルド・ザイコウスキー、ブライアン・ドン:高齢者のQuality of Lifeに及ぼす日常生活の身体活動量－高齢者版身体活動調査票の開発－. デザントスポーツ科学, 19:94-103, 1998
- 2) 水上喜美子、保野孝弘、佐久川肇、山村健:養護老人ホームに在住する高齢者の活動・休止リズムの日内変動について. 川崎医療福祉学会, 11(1):185-191, 2001
- 3) 西田裕介:高齢者の日常生活を反映する運動・活動量の評価と実際－健康寿命の延長に向けて－1. 施設利用者に商店を当てて. 理学療法, 32(4):219-223, 2005
- 4) 阿部勉 牧迫飛雄馬、徳原理恵:高齢者の日常生活を反映する運動・活動量の評価と実際－健康寿命の延長に向けて－2. 訪問リハビリテーション対象者の実際とその実践報告. 理学療法, 32(4):224-226, 2005
- 5) 樋口博之、綾部誠也、進藤宗洋、吉武裕、田中宏暁:加速度センサーを内蔵した歩数計による若年者と高齢者の日常身体活動量の比較. 体力科学, 52:111-118, 2003
- 6) 村木敏明、伊藤文香、藤田真樹、花岡秀明:農村地区と市街地区に在住する高齢者の夏季と冬季における日常生活身体活動量と生活リズムの特徴. 作業療法, 24(supple):163, 2005
- 7) 村木敏明、長尾徹、金子翼、石川雄一、米田俊彦、篠原英記:地域在住男性高齢者の日常生活活動量を健康関連QOLに関する一考察. 作業療法, 19(supple):455, 2000
- 8) 大津昌弘、森島健、浅田春美、青木いづみ、伊藤滋唯、池田恵、菰田有紀:在宅高齢者の生活活動量を規定する要因. 理学療法, 27(supple):384, 2000
- 9) 野藤弘幸、山田孝、原田由紀子:介護老人保健施設入所者の生活特徴－痴呆・非痴呆群の比較検討－. 作業療法, 20(supple):377, 2001
- 10) 佐藤善久、小野咲子、池田正人、堀江明子、大西敬子、阿部芳久:生活習慣記録機による痴呆性高齢者の生活時間と活動量の比較. 作業療法, 20(supple):373, 2001
- 11) 青木浄亭、大川匡子、山田尚登、松田桜子、野口敏文、宮川正治:痴呆及び健常老人における時系列活動量データのフラクタルの相違, 老年精神医学雑誌, 14(5):650, 2003
- 12) 小西良介、萩原礼紀、久保達郎:高齢者の活動量比較. 理学療法学, 32(supple2):412, 2005
- 13) 渡邊博、樋口健吾、水上諭、山口寿、釜崎敏彦、中倉裕文、北田智則、宮崎潤、金ヶ江光生:地域在住高齢者の転倒不安が身体活動量に及ぼす影響とその関連要因について. 理学療法学, 32(supple2):102, 2005
- 14) 大平雅美、楊箒隆哉、木村貞治、ゴー・アーチェン、横川吉晴、百瀬公人、三好圭:健常高齢者における日常活動量経時的変化の検討. 理学療法学, 32(supple2):590, 2005